



仕事にやつと慣れてきた時、一人の小児糖尿病患者に出会いました。突然インスリンの分泌が枯渇

小児糖尿病患者

阿武隈川が大きく北に流れを変えるところ、私の勤務する丸森病院があります。保健・福祉・医療の統合・再編にとまない今年四月から院長となり、責任ある立場で地域医療を展開していることと思っています。

丸森病院の常勤医は内科一人、外科三人(その内一人は二十三期生の川嶋和樹先生)。外来一日二百人、入院七十人の患者さんの対応をしています。常に医師不足の状況です。

丸森病院の常勤医は内科一人、外科三人(その内一人は二十三期生の川嶋和樹先生)。外来一日二百人、入院七十人の患者さんの対応をしています。常に医師不足の状況です。

チーム活動で医師不足補う

するI型糖尿病の患者さんです。II型糖尿病の患者さんと違って、最初からインスリン注射

が必要で、良好な血糖コントロールを維持するためには一日四回の注射が必要でした。

病状について両親に説明すると、糖尿病はぜいたく病で大人がかかる病気というイメージ

がありまして。そして、「ぜいたくさせていないのに、どうしてうちの子が糖尿病になるの?」という思いが強く、なかなか受け入れてもらえませんでした。

患者には今までと同じ環境で学校生活を送らせてあげることが大事であると考え、何度も学校の先生と話し合いを持ちました。この時ほど、医師一人の限界を体験した事はありませんでした。この思いが、〇三年十一月、糖尿病外来の開設につながっていきます。

さらに、診察を待っている間には、管理栄養士による食事指導、薬剤師によるインスリン自己注射指導を行っています。治療困難な患者さんについては定期的にケースカンファランス(個別症例ごとの対応)を実施。失明、透析、下肢切断の患者さんを絶対に発生させないことを目標にチーム医療を行っています。

11期生1988年卒

おおとも まさたか
大友 正隆



糖尿病セミナー(糖尿病教室)での集団指導の様子。「糖尿病性神経障害の診断と治療について」の講演を行った=6月12日

丸森町国民健康保険丸森病院

【私の勤務地】丸森町は人口1万7032人(6月1日現在)、面積は273.34平方キロ。1954年、2町6村の合併で誕生した大きな町で、宮城県の最南の地にある。周辺を阿武隈山系の山々に囲まれ、北側を阿武隈川が流れている盆地状の地形の町。丸森病院は地域医療の中心として1949年の開設以来町民の健康を支えている。

専門外来を開催

当院においては、糖尿病患者が外来患者のほぼ六分の一を占めるにもかかわらず、専門外来がなく、糖尿病患者が一般患者に埋没しているのが現状でした。

そこで、脱落なく外来受診を

義務年限は既に終了している私ですが、この町の住民が私を必要としている限り期待にこたえなくてはいけないと思う毎日です。

病棟から見える穏やかな阿武隈山系の山々の緑が、今日も私を励ましてくれています。

(次回予定は石川県)